禅のお話 02

こんにちは、ナビゲーターの金子と申します。
本日は、禅僧の逸話のお話、第二弾をお届けします。お気軽にお聞きくだされば と思います。

江戸時代の禅僧に仙厓義梵（せんがいぎぼん／1750-1837）がいます。仙厓が描いた、禅の味わいあふれる禅画は、近年は海外にまで紹介され、高い評価を得ています。
仙厓は 88 才まで亡くなるのですが、その死の床を弟子たちが取り囲んでいました。

一人の弟子が「和尚さま、最期になにか良い言葉をお遺し下さい」とお願いしました。
すると仙厓和尚は『死にとうない、死にとうない』と仰いました。

「天下の名僧ともあろう方が、そんな見苦しいことでは困ります。もう少しましなことをお願いします」と再度お願いしたところ
仙厓和尚は『ほんまに、ほんまに』と仰いました。

もう一人、明治時代、素晴らしい僧といわれた、臨済宗天龍寺派の管長、橋本峨山（がざん）の臨終のお話を紹介いたします。

峨山は息を引き取る間際、弟子たちの全員を集めます。そして
「おまえたち、よく見ておくがよいぞ。ああ、死ぬということは辛いもんじゃ。死にとうないわい。死にとうないわい」と言いつつ、峨山は死んでいったのです。彼は弟子たちに、人間の死の苦しさをしっかりと教えたのでした。

「とんち」で有名な室町時代の禅僧、一休さん。その臨終の言葉は「死にとうない」だと伝えられています。

字がというものがあると、格好つけたりして本音を言えなかったりするでしょう。それをさらりと言葉にできるのは、ある意味悟った状態だといえます。

私たちは静かに厳かに死にたいと願っています。でもそれは、思うがままになりません。
思うがままにならないことを、思うがままにしようとするのは、おかしな欲望です。

どうしようもない現実は、思うがままにならないとあきらめる。誰だって死はこわいものです。その恐いものを、本当に恐がることができる人間が、真の禅僧だと思います。

立派に死のうが、死にたくないとおびえながら死のうが、どちらでも良いのです。
死に方なんてどうだっていい…と悟るのが、禅らしいと思います。

明治の俳人、歌人であった正岡子規がこんなことを言っています。
彼は脊椎カリエスのため、30 才前から 34 才で死ぬまで、ほとんど病床にありました。子規は体の痛みに苦しみ、時には絶叫し号泣します。その病床である日、彼は忽然（こつぜん）と気付きます。

「私は今まで禅宗のいわゆる悟りというものを誤解していた。悟りということは、いかなる場合にも平気で死ぬることかと思っていたのは間違いで、悟りということはいかなる場合にも平気で生きていることであった」

いつでも平気で死ねるという覚悟、生よりも死を見据えることを禅だと思う人もいますが、そうではありません。
仏教では、思い通りにならないことを「苦」としています。
思うがままにならぬことは思うがままにしておく。全てを受け止めて生きていく。それができるのが禅だろうと思います。